

インドシナ反共ゲリラ軍で活躍している
一日本青年の手記

たった一人の義勇軍

ベトナム戦争はいまも続いている

インドシナ反共三国
連合予備会議議長

佐山初治 著

インドシナ反共ゲリラ軍で活躍している
— 日本青年の手記 —

たった一人の義勇軍

佐山初治 著

ベトナム戦争はいまでも続いている

■著者 佐山 初治（さやま はつじ）について

本人も『あとがき』でことわっているように、著者の略歴や住所などを明らかにすることは、著者の現在の立場上許していただくことにする。

この書の著者名は、彼が現在日本で使用している名前である。現地では『東方将軍』と呼ばれていて、本文にもあるようにインドシナ三カ国の反共連合予備会議で議長を務めるなど、極めて重要な役割を果たしている人物である。

なお、本書に掲載された写真は、著者の撮影によるものである。
(編集部)

たった一人の義勇軍

定価 1,200円

昭和56年2月26日 初版発行

著 者 佐 山 初 治

企 画 サンケイ新聞文化事業社

発行者 野 地 二 見

発行所 日本工業新聞社

〒100 東京都千代田区大手町1-7-2

振替 東京1-36340 電話03-231-7111

印刷所 株式会社 丸井工文社

© 1981 検印略 乱丁・落丁はお取り替えます。

ISBN4-8191-0797-6 C0036 ¥1200E

まえがき

拝啓 御地では朝夕はや秋の気配の立つところでございましょうか。貴方様には益々、ご清祥の段大慶に存じます。

当地は、いま雨期のさなかでございます。ひとしきり襲ってくる豪雨の合間には青空の下、密林の緑が輝きます。

先般、東京でお目にかかった折には、暖かい励ましのお言葉をいただき、大変感激致しました。小生は翌日、急遽ラオスに向かいました。こちらに来て十日になります。いまはタイ、ラオス国境の山の中におります。

よく雨が降ります。熱帯モンスーン地帯の雨は想像を絶します。この降雨のせいでしょうか。あるいは今夏ヒマラヤ方面に異常高温でもあったのでしょうか。メコン河が氾濫して洪水をおこしています。一帯に浸水した水は背も立たないほどの大水

原になっております。戦乱のインドシナ半島は今年も農作物は不作でしょう。

十一月の雨期明けまで、われわれは身動きができません。銃を隠して、しばらく浅い眠りに入ります。この機会に私は貴方^{あなた}様に、私の考えをお伝え申し上げておきたいと思います。私が何者で、なにを考え、なにをしようとしているかを。そして、貴方様のご支援を是非ともいただきたいのでございます。

私は、共産軍が首都ビエンチャンを制圧した直後の一九七五年十月に、再度ラオスに入国致しました。

その途次、タイ、ラオス国境で私は数万のラオス避難民に遭遇し、思わず戦慄^{せんりつ}致しました。

おびただしい難民の群れの中に入った時、共産主義の狂気に押し潰^{つぶ}された人たちの痛みと悲しみが、身体に浸みるようで、私は弱者の運命に同情の涙を禁じ得ませんでした。

ラオス王国時代、人々の生活は、水準としては高くはありませんでしたが、明るい前途と生活の自由がありました。生きていくには少しは楽しい国だったのです。そ

の国をこんなにしてしまった共産主義者たちに、激しい怒りを覚えました。

私は、彼ら難民をアジアの朋友^{ほうゆう}として支援していくとともに、その難民をつくり出している、憎むべき共産主義政府を倒すことに生涯の願いをかけ、自らの道を求めていこうと此^この時、決意したのでございます。

それまでの私は、十年以上もラオスで青春を過ごしてきたからであります。

第二次大戦後に成立した国際秩序は、構造的に変化をはじめています。その変革の中でも、インドシナ半島の変化は最も大きいものの一つでしょう。

強力な軍事力を持つに至った北ベトナムは、全インドシナ半島を共産主義人民共和国化すべく、あらゆる方向に兵を進めました。

ラオスもカンボジアも、その大部分が、北ベトナムの支配下に入ってしまった。インドシナ人民は今、共産主義者の指導下に惨憺^{さんたん}たる苦難の生活をしております。

それは私がこの目で見、聞いていることなのです。から間違いないありません。闇の中で

執行される処刑や、密告制度による肅清しよくせいの恐怖、とどまることのない経済的混乱、宗教信者への迫害、夜ごとかり出される共產主義学習会など、国民はみんな痛ましい傷を背負っております。

こういう実態ですから、共產ベトナム軍に抵抗して、自由なインドシナに還すための反共ゲリラは、現在インドシナのどの地域においても、現地民衆からは、心情的に理解され歓迎されております。

また敵共產軍部隊の兵士たちも、一人一人はまぎれもなく現地住民であり、彼らも状況次第では降伏することもあつて、前途に期待と希望がつけられるのです。

ゲリラ側の力が強まるに従つて、共產軍から投降する兵の数も、おそらくわれわれの予想を越えるようになるでしょう。

しかし、果たして近い将来、本当に難民たちが、陸続りくぞくとして祖国に帰還できるよう自由なインドシナへ戻る日があるでしょうか？ 自由ラオス、自由カンボジア、

自由ベトナムを蘇よみがえらせ、人々が懐かしい故郷で安穩あんのんに自由に暮らせる、平和で落ち着いた日々がやってくるのでしょうか？

それは誰にも確言はできません。

共産ベトナムはますます軍事力の強化に力を入れています。

したがってこの目的を達成するためには、インドシナ各国の反共ゲリラが、連合して世界に訴え、世界の自由主義諸国から大きな援助が得られるように運動してゆかなければならないと思っています。この運動だけが、この自由のための闘いだけが、そして日本や世界自由主義各国の皆様の力強い支援だけが、難民たちに残された、たった一つの希望の光であり、これに頼る以外には生きる道がないのです。人々に知られることもないインドシナの奥地で、民族の独立と自由を求めて、強大なハノイの共産主義者と懸命に戦っている戦士たちに、なにとぞ、ご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げる次第でございます。

敬具

一九八〇年八月三十日

佐々 初治

目次

まえがき

第一部	
アジアへの情熱	13

鹿島神流の免許皆伝	13
-----------	----

密航をねらって漁船の甲板員に	18
----------------	----

岡村カメラマンの写真でラオスを目指す	26
--------------------	----

第二部	
ラオス王国時代の青春	31

——憧れのラオスへ——

バンコク上陸前に抜刀事件	31
--------------	----

第三部 念願のラオス中立軍に

異国最初の夜が夜行列車……………	37
タイ・ラオス国境メコン大河を渡る……………	40
ベントの先生に救われる……………	44
憧れのビエンチャンに着く……………	49
坂口さんの家に居候……………	53
アメリカ大使館の下働きに……………	57
クーデターがもたらした米大使館警備隊長への抜擢……………	59

コン・レ將軍に辻政信氏のことを聞く……………	71
ジャール平原でデビュー戦……………	75
メオ族の部落……………	83
共産軍の大夜襲……………	87
九死に一生……………	91
山岳戦闘の辛さ……………	98

再びアメリカ大使館勤務……………	100
十一年ぶりで日本へ……………	104
第四部 共産ラオスの惨状と反共運動への参加 ……………	109
ダム工事の通訳で二年ぶりのラオス入り……………	109
初めて見る難民に衝撃——人民共和国の悲惨……………	111
難民救済のため反政府運動を志す……………	116
悲惨なラオス人……………	118
共産革命後のラオスは混乱ばかり……………	123
ソ連人は特別待遇……………	130
釣りタイ領での休日……………	132
タイ領避難家族へのメッセンジャー……………	135
ついに会えた反政府ゲリラ幹部……………	137
ダムの写真を撮りまくる……………	140
反政府ゲリラの活発化と難民の増加……………	142

首都地区反政府ゲリラの中心となる……………	145
パテト・ラオ兵に逮捕される……………	147
国有化と配給に苦しむ国民……………	156
反政府運動支援がついに発覚……………	159
脱 出 行……………	162
反共ゲリラ司令部へ……………	166
タイの将軍に会う……………	168

第五部 メコンに自由と平和を返せ……………

日本人協力者の説得……………	173
反政府ゲリラ基地を案内……………	178
KMTとの武器調達交渉……………	180
東方よりの使者……………	184
高僧ニャポオ……………	188
部落での反共宣伝工作……………	192

一大集結した反共ゲリラ	200
共産側の奇襲攻撃	204
強行軍で基地へ帰る	212
第六部	
インドシナ三国反共連合の結成を説く	219
黄金の三角地帯	219
ビルマ・カレン民族解放軍	223
ベトナム政府の暗殺命令で生命の危機	231
北部自由ラオス軍基地へ	235
女性ゲリラ兵士	240
ラオス北部の基地で状況把握	246
第七部	
インドシナ三国反共連合予備会議の成功	253
クメール・セリカの大佐の協力	253
議長としての私の連合構想	257

三国連合予備会議始まる……………	259
構想と現実の調整に苦心……………	263
基本的合意なる……………	267

参考資料

◎ラオスの概要……………	271
ラオス内戦のいきさつ……………	271
軍事……………	274
外国の経済援助および協力……………	275
◎使用武器の概要……………	280

あとがき……………	285
—われメコンに死なん—	

第一部 アジアへの情熱

鹿島神流の免許皆伝

仙台駅から東京行き普通急行に乗り込んだのは、昭和三十四年（一九五九年）の二月のことであつた。

これといった目的はなにもなかった。向学に燃えていたというわけでもなかった。

なんの目的もなく、ただ東京に来たからといっても、ブラブラしていることは性格に合わない。

わずかだったが武道には心得があり、関心が強かったので、腕を磨くことを思い付き、道場探しをはじめた。

そんな時に、知人が鹿島神流十八世師範、国井善弥道之先生の道場を教えてくださいました。

私は東京に出て来たばかりで、いわば西も東もわからない。知人の教えのままに、さっそく北区滝野川の鹿島神流の道場に出向き、入門を願ひ出た。

気難しそうな先生ではあったが、束脩（そくしゅう）（入門金）もとらず、入門を許してくださった。

その日から稽古である。

先生の剣は厳しい。入門者はかなり多いのだが、門弟として残っていられるのは数えるほどしかない——と先輩が話してくれた。

私は石にかじりついても頑張る覚悟を決めていた。

先生は、稽古はじめと、終わりには神前に正座して祈られる。二拝二拍一拝である。

稽古の途中で、真剣で稽古を付けられる時も、剣を前に置いて神に祈り、神から授かった剣を抜かれるのである。

そして最後に先生は、鹿島神流の奥義を次のように教えられた。

剣に剣なし、体を以て剣となす。

体に体なし、神を以て体となす。

虽然以て円く、輝然以て明らかなり。

待たず、慮らず、思わず、止まらず。

板上の丸を転がすが如く。

水中の瓢を圧するが如く。

攻めるに不非、守るに不非。

自ら行つて包容同化の大義を示す剣。